
雨の日の大佐に10のお題

桐生 拓人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨の日の大佐に10のお題

【Nコード】

N5828A

【作者名】

桐生 拓人

【あらすじ】

ロイヤエドワード、軍部のメンバーのある雨の日の日常。ギャグです

1：無能（前書き）

全てのキャラにおいて壊れています。注意！

1：無能

1：無能

「あーあ。なんか雨降ってきそうだよ」

言われて空を仰いでみれば視界いっぱい広がる灰色の空。空気も生暖かく独特の匂いが風にのって鼻へ運んでくる。

「さっきまであんなに晴れてたのにねー」

買い物袋を抱えたアルフォンスは、この後ネコちゃんに餌やりに行く予定だったのに、とばやいた。

「夕立だろうし：直ぐに止むだろ」

同じように袋を抱えたエドワードが言った。

「一雨来る前に宿へ帰るか」

「そだね」

言い終わらないうちに二人は曇り空の下、湿ったイーストシティ

の路地を走った。

そーだ。こんな日くらいは無能になる前に迎えに行つてやるかな…

「ごめんアル。傘持つてる？」

走っていたエドワードが唐突に言った。

すると、既に悟っていたらしいアルフォンスは止まって、袋の中から傘を取り出した。

「はいはい。どうぞ迎えに行つてきて下さい。ついでに朝まで帰つて来なくていいから」

あんまりな言い様に思わず赤面して振り返るが、弟のほうが一枚上手。傘を押し付け追い出されてしまった。

「…何かムカつく…」

サア

…

「…はあ…」

ロイ・マスタングは窓を眺め、そして机の上を眺め嘆息した。

なぜ、如何して書類の多い日に限ってここの雨が降るんだ。このままでは雨の日無能説が…っ！

「大佐。窓ではなく書類を見てください」

優秀な副官は、雨の日だろうと書類が多かろうと容赦しない。綺麗な顔で、無言で睨まれるとなおさら怖い。

「大佐あゝ。まだっスかあ？」

間拔けな声で、ついには他の部下達も騒ぎ出す。このままではいずれ…

だが、こうジメジメしていればやる気が出ないのは誰だってそう（なハズ）。うちの部下ってば如何してこう血の気ばかりが多いんだか。

「…お前達は雨。やじやないのか??」

するとみな一同顔を見合わせた。

「嫌も何も。仕事ありますし」

「雨に降られても建物のなかですし」

なんてやつらだ。こんなノー天気なやつらに私の苦悩はわかるまい。

「大佐はどうしてやなんですか？雨」

「だって。雨の日は湿気てるし。髪の毛跳ねるし。書類多いし。外に出たくない」

「…」

アンタは女子高生かつ！！！！

「…」

リザは眉間に青筋を立て、おもむろにホルスターから愛銃を引き出す。標準はもちろん……

「大佐が湿気たマツチだろうとアホ毛だろうと書類溜めようと無能には変わらないんですっ。アホなことってないでさっさと仕事してください！！」

ハアト

でないとアナタの心臓を狙い撃ち！！

シヨックを受けながらも一心不乱に書類に書き殴るロイ。それを鬼の目で見つめながら愛銃を鞭の様に振るい荒れ狂うリザ。

足元で蹲る部下達は思った。

ああ……このヒトは遂にキレてしまった……

こうなつては誰にも止められない

ナウ カの王蟲の様に………!!!!!!

と。

「こんにちは。大佐いるー??」

恐る恐る扉を振り返れば、かの有名な金髪の最小国家錬金術師。

「何？」

訂正：最年少国家錬金術師。

「中尉？如何したの？」

少年の声に自分を取り戻したりザは、ロイの襟元を掴み上げたまま視線を下げる。そこには弟のように可愛がつている三つ編みの彼。
「あらエドワード君よく来たわね。お茶なら今入れるわ」

摩訶不思議。荒れ狂った鬼も、国家錬金術師の手によれば優しい女神に。

「中尉、大丈夫？」

子犬のように見上げてくるエドワードに、リザはメロきゅんゝ何もかも理性も愛中も放り出してエドワードを抱き締めた。

「全然平気よ。どっかの無能がちよつと使えなくなったくらいでどうもしないわ」

「ちよ、中尉！私のエドワードを話したまえ！」

「（ちっ）わかりました。じゃあ、お茶持ってくるわね」

今ちつて言っただけねちつて言っただけね??

「もぉ！大佐も中尉困らすんじゃないぞ？」

「ああ。もう二度とあんな恐ろしい思いごめんだ（しみじみ）」

何とか手中にエドワードを取り返したロイは、ご満悦の様子でまた仕事を始めた。

そのざまを見て今まで傍観していた哀れな部下達は思った。

ああ…ナウ カだ…ナウ カは最年少国家錬金術師だったんだ…
！！

「ねえ。終わったあ？」

それから数時間後。空もすっかり真っ暗になり、雨脚も大分強くなってきた頃、数時間ぶっ続けでロイの膝に座り続けたエドワードはいい加減痺れを切らすのを通り越え、限界へのチャレンジデスマツチ！！な心境だった。

（心配なんかしないで、とつとと帰ればよかった）

「終わった…。長く待たせてしまつてすまなかつたね。さあ、すっかり暗くなつてしまつたことだし帰るとしようか」

ようやくロイの膝から開放され、思う存分萎縮しきつた筋肉を伸ばした。明日になったら筋肉痛になつてるかもしれない…。

玄関口まで来て、ロイが一言。

「傘忘れた…」

残念なことに、わずか29歳にして早くも健忘症か？ロイ・マスタング！！

ロイの頭には、最早リザに散々虐めぬかれた記憶しか残っていない。

「…無能」

おまけに恋人からのこの一言。さすがに痛烈。色々こみ上げるものを呑み込んでロイが振り返ると、目の前に、傘。

「一個しか…ないけど」

お客さん入りますか？

無言で睨み上げながら傘を差し出してくる少年。とっさに反応できずに固まる中年。

「…ありがとう」

ええ、よろこんで。

さすがのロイも、この日ばかりは無能説を甘受しない訳にはいかなかった。

f i n

2 優秀な部下達（前書き）

この話は”無能^が”の続編となっております。単体でも読めますが、気になる方は無能を先にお読み下さい。
それでは

2 優秀な部下達

ザアアアア

：

昼間から絶え間なく降り続く雨は、夜の暗闇と静寂の中でいよいよ本降りとなっていた。窓の外では大量の雨粒と水滴で発生した霧で、完全に世界から隔離されていた。

何もかもが暗闇と雨音に掻き消され、遮断されたこの部屋は最早

異質の空間と化していた。

寒い

寒いよ

ギシッ

ひんやりと冷たいこの部屋で

吐き出す熱い吐息と脂汗。

寒いのに熱い

静かすぎて煩い

矛盾した空間は徐々に狂気を孕んで

蘇える悪夢と化す

さん

ある

兄さん

アルフォンス

いめん

ごめんなさい

もうオレにはお前が見えない

彼方へと消え入る声で

オレを

呼ぶのは誰れ？

兄さん

ある

ごめんね

おまえを

おまえだけをあいしていたよ

す
な

すぎ

おれのせいで、姿を亡くした

魂だけの

ハラカラ
いとしい同胞

すぎ

嗚呼

す
ね

甘美なる

これは

自決の夢

ほら、
また

えど

えどわーど

呼ばれるたびに

足元に巢食う”死”はその赫い口を近づける

もっと

その
声で

オレを呼んで

えどわーど

興奮した精神は身体に影響を齎し鼓動を跳ね上げる。

見開いた視界は闇。覆いかぶさるようにこちらを伺っている。

「闇に喰われたのか？」

そうかもしれない。

見開いた瞳からは後から後から水が湧き出てくるし、シャツも掌も湿ってずるりと滑る。

明日、乾涸びてたら如何しよう。

そんなことも気にせず、闇は静かに言った。

「私が、全て取り戻してやろう」

闇に喰われた君の全てを。

だからもう寝なさい。

朝まではまだ大分ある。

そつと目元を拭われる感触と暖かい指。先ほどとはまったく違う穏やかな闇に、ゆらゆら意識も溶けていく。

取り戻すなんて無理だよ。

だって

あの闇は

アンタ自身だもの。

そうしてまた

ああ、
喰われる。

気が付けば白い世界。

眩しいシロのなかで気だるい身体を起こしてみれば、昨日の出来事が全て本当だったことを実感する。

良かった乾涸びてなくて。

「おそよう。すっかり冷めてしまった昼飯ならあるのだが食べるかい？」

声がした方へ顔を向けると、ロイがこちらへ水の入ったコップを差し出していた。

乾涸びていないとはいえ、カラカラだったこともまた事実なので水はありがたく受け取っておくことにした。

やがて全てを飲み干したとき、あえて質問には答えずにエドワードは別の質問を投げかけた。

「服は」

「あそこのハンガーにかかっている」

指差したほうにはクローゼット。丁寧にあそこに掛けたのか。

ベッドからおりて手早く自分の服に着替え、そのまま扉へ向かうエドワードにロイが言った。

「もういくのかい？」

もう少しゆっくりしたっていいのに。

「……オレは、アンタのお荷物にはなりたくない」

せめて背中くらいは預けられる人物でありたい。

あの優秀な副官のように。

下を向いて俯くエドワードにロイが言った。

「君は一人一人に自慢してまわりたいくらい優秀で可愛い私の部下だよ」

だから、大丈夫。

「因みに今朝アルフォンス君から電話があっただが、今日明日と中尉の家でお世話になるそうだから。君をよろしくと頼まれた手前、

一人で宿に帰すことなんてできるわけないだろう?」
「なっ」

さあ。そう慌てないで。

遅いティータイムといたしませんか?

「中尉。中尉はいつから知ってたんすか?」

「大分前からかしら。長い付き合いだもの。態度見てれば判るわよ」

「あの二人、まだ気付いてないと思ってるのかな」

「まったく。優秀な部下がいないとたよりないんだから」

NEXT 3 たまには、のんびり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5828a/>

雨の日の大佐に10のお題

2010年10月9日16時43分発行